研究論文

教師－学生間のインターアクションを活性化する基盤づくり
オリエンテーションにおける「マンダラ・チャート」の使用を中心に

Steve T. Fukuda[1)]　　坂田浩[2)]
1）徳島大学全学共通教育センター　　2）徳島大学国際センター

授業を活性化するための方法論を議論する際に、「インターアクティブ（双方向性）」という言葉がよく使われる。この言葉が意味するところとしては、①教師－学習者間のインターアクションを活性化する、②学習者－学習者間のインターアクションを活性化する、という二つの意味が混在していると思われるが、本稿では特に「教師－学習者間のインターアクション」に注目し、①両者のインターアクションを活性化するための素地となる「教師－学習者間のリベラルな関係」を如何に形成するか、②そしてその具体的な手立てとして、「マンダラ・チャート」(1) を授業オリエンテーション時に利用した場合、どのような効果が期待できるのか、という 2 点について考察を行うものである。
（キーワード：インターアクション、授業構築、オリエンテーション、マンダラ・チャート）

Fostering Teacher-Learner Interaction in the Classroom: The Use of the “Mandara Chart” in Classroom Orientations

Steve T. Fukuda[1)]　Hiroshi Sakata[2)]
1）Center for General Education, The University of Tokushima
2）International Center, The University of Tokushima

The term “Interactive” has been frequently used in educational research, and in the present study we focus on how to build a basis to enhance teacher-learner interaction in the classroom and to develop a more liberal relationship between them. Furthermore, we propose the use of a “Mandara Chart,” a newly-developed idea generation support tool, in the course orientation to negotiate the class content with the learners. We also examine the efficacy of the “Mandara Chart” in the course orientation for the development of a more liberal relationship between teacher and student.
(Key words: Interaction, Orientation, Mandara Chart)

1. はじめに

現在、様々な大学で多様な教育改革が展開されているが、徳島大学でも共通教育課程や専門教育課程で積極的な改革が行われており、例えば、共通教育「社会性形成科目群」で展開されている「地域社会人ボランティアを活用した教養教育」は「平成 20 年度質の高い大学教育推進プログラム」に有意義なプログラムとして採択され、全国レベルで高い評価を受けている。また、同課程が実施している「中間アンケート」も他大学から高い評価(2) を受けており、全体的なカリキュラムならびにプログラムといった面ではかなり整備が進んできていると考えられる。

一方、各授業での指導方法に関する改革を見ると、各大学で様々なファカルティー・ディベロップメント（Faculty Development: FD）が展開されており、大学教育における教育力向上の大きな原動力となっている。徳島大学においても「FD 専門委員会」のもとで様々な FD 活動が展開されているが、今後は全学的な FD 支援組織が各学部における FD 活動を積極的に支援するという「相互研修コーディネート型」(3) で様々な全学 FD を展開するように計画されており、指導方法に関する実践研究も更に活性化されるものと期待される。

今回、本稿では新たな指導方法の一つとして「マンダラ・チャート」を取り上げる。「マンダラ・チャート」は、新たな思考整理法としてビジネス界からの大きな注目を集めており、2008 年 10 月に発売された「マンダラ手帳」は発売から 2 カ月余りで約 1 万 2000 冊を売り上げるヒット商品となっている。同チャートは仏教寺院などにある曼荼羅を基に作成されており、中心部に達成したい目標を、周辺部の 8 つのマスにその目標を達成する方法などを書くように設計されており、目標に向か

うためのアイディアや行動を非常に効率よく整理できるようになっている。

本稿では同チャートを教育現場（特に各授業のオリエンテーション）に応用する方法について考察を行うが、後述するように、同チャートは、①準備が簡単で、使い方を理解すればすぐに授業で活用できる、②特に各授業のオリエンテーションを実施する際に非常に大きな効果をもたらすと期待できることから、「教師の教育力向上」という全学 FD の趣旨に大きく寄与するものと考えられる。

具体的な指導方法を身につけることは教師の教育力向上には必要不可欠であり、今回紹介する「マンダラ・チャート」も各教師の授業力を向上させるための可能性を十分に秘めたツールであると考えられる。本稿が今後の全学 FD に何らかの形で寄与できれば幸いである。

2. 現行の授業シラバスにおける課題

殆どの大学で授業シラバスがインターネットなどで公開されているが、その多くが「何をどのように教えていくか」に関する情報を学習者に提供することを目的としたものであり、教師－学習者間の意見調整を基にした授業設計を実現するという点では課題が残るものとなっている。

例えば、徳島大学が公開している授業シラバスを見てみると、

① 授業科目名
② 授業の目的
③ 授業の概要
④ キーワード
⑤ 関連科目
⑥ 受講者へのメッセージ
⑦ 到達目標
⑧ 授業の計画
⑨ 成績評価の方法
⑩ 再試験の有無
⑪ 教科書
⑫ 参考書
⑬ Web ページ
⑭ 連絡先

といった 14 項目に関する情報を学習者に提供するように設計されており、他大学同様、「学習者との意見調整により授業設計を行う」という点では課題が残るものとなっているようである。

実際に授業シラバスを作成する際には、「この授業を受ける学習者が何を期待しているか」、「専門性や教養を高めるには何が必要なのか」、「この授業を受ける学習者にはどのような指導方法が適切なのだろうか」といった項目を熟慮しながらシラバスを作成しているわけであるが、現行の授業シラバスでは、上記のような教師側の熟慮が学習者に伝わりにくく、ともすると教師が学習者に「本授業ではこれをやります」と強要していると誤解されてしまう可能性も考えられる。

一方、学習者の立場からすれば、「この授業でこういうことを学びたい」、「この授業で何をどう学ぶのだろう？」といった期待や疑問を少なからず抱きながら授業に参加していると思われるが、教師がその期待や疑問に気づくことなく、事前に設定したシラバス通りに授業を展開していったとすれば、教師および授業に対して学習者が「期待はずれだった」、「自分たちの言うことを聞いてもくれない」といった否定的な印象を持ってしまい、結果として学習動機や教育効果の面でマイナスの効果を生み出してしまう可能性も考えられる。

例えば、発信型英語の授業シラバスで、「本授業の目的は、各受講者に英語によるプレゼンテーションを通して英語力の向上を目指すものである」と記載していたと仮定してみよう。英語でプレゼンテーションを行うこと、ならびにその過程での学びが各受講者の英語力を向上させるであろうことは、過去の教授体験やこれまでに積み上げてきた英語教育に関する知見を基に十分推測可能であり、授業を設計・担当する教師にとっては非常に納得のいくところであると思われる。しかし、学習者が「何故プレゼンテーションなのか？」、「どのようにして英語力の向上が望めるのか？」などの疑問を持ったまま授業を受けているとしたら、そして、教師がそれらの疑問に答えることなく授業を展開していったとしたら、当然のことながら学習者の学習動機だけでなく、授業における教育効果自体が非常に低下してしまうと考えられる。

もちろん、授業シラバスを通して授業概要や計画などに関わる基本情報を提供することは、授業

を設計する教師ならびに学習者にとって非常に有意義であることは確かである。加えて、「すべての学習者に授業に関する基本情報を等しく提供する」というシラバスが持つ本来の目的を考えれば、現行の授業シラバスでもその役割を十分果たしていると言えるのかもしれない。

しかしながら、「教師－学習者間のインターアクションを促進する」という視点から現行の授業シラバスを考えてみた場合、教師－学習者の双方が「こういう内容を伝えたい（または学びたい）」という期待や、「何のために〇〇をするのか」といった疑問をお互いにキチンと共有し、調整しない限り、インターアクティブな授業を作り上げることは不可能である。授業に関する知識、権限などの面で教師－学習者間に格差が存在するのは致し方ないが、それらの格差を出来るだけ少なくし、リベラルな関係を教師－学習者間で形成することが両者のインターアクションを活性化し、学習者からの発言を促すための素地を作る第一歩となると考えられるからである。

3. オリエンテーションにおける枠組み形成

現行の授業シラバスも学習者に対し授業に関する基本情報を等しく提供するという非常に重要な役割・機能を有していることから、「教師－学習者間の誤解や過度な期待などを調整する」という目的のためだけに現行の授業シラバスを変更することは、無用な混乱を引き起こすだけであり、さほど大きなプラスになるとは思えない。むしろ、「現行の授業シラバスの形態を変える」ことよりも、現実的には「現行の授業シラバスがカバーできない部分を別の手立てで補完する」ことの方がより効果的であると考えられる。

この点において、前述した徳島大学共通教育における「中間アンケート」は十分評価に値する試みであると思われる。学習者からの評価を学期の中間時点で実施することにより、授業に関する要望などを教師に伝え、授業の初めに存在していた両者の差を出来るだけ調整しようとしていると考えられるからである。

しかしながら、本来はこの手の調整は各授業のオリエンテーション時に実施されるべきであり、教師－学習者の関係性がほぼ形成されている学期の途中でアンケートを実施しても、その効果は限定的であると言わざるを得ない。

先に述べた発信型英語授業の例を基に考えてみると、学期の途中で学習者から「何故プレゼンテーションなのか？」という疑問を提示されても、これまでプレゼンテーションを中心に授業を行ってきた教師としては、「残りの学期で混乱を生じさせないためにも、今更プレゼンテーションを別のものに変更するわけにはいかない」といった決断をせざるを得ないであろう。

そして、中間アンケートの結果、「基本的な授業のスタイルに変更がない」ことが明らかになった場合、「中間アンケートで意見を出しても、意味がない」、更には「やっぱり意見を言っても変わらない」などの否定的な印象を学習者側に抱かせてしまう可能性も否定できない。

このように考えると、学期の中間時点で学習者からの意見を集約するよりも、学期初めのオリエンテーションで直接意見調整を行い、教師－学習者間で同意可能な授業の枠組みを形成する方が、双方向的でリベラルな関係を形成し、教師－学習者関でのインターアクションを活性化するというためにはより望ましいと思われる。

4. 「マンダラ・チャート」を利用した授業の枠組み形成

4-1. 「マンダラ・チャート」について

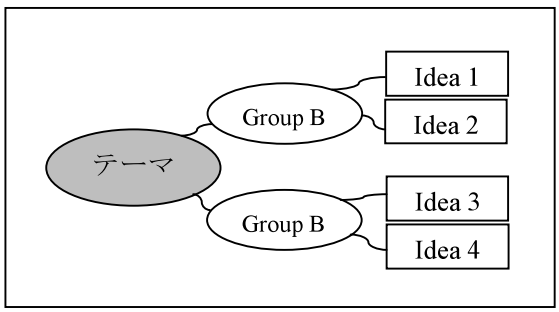
「マンダラ・チャート」（図 1）は、9 分割のマトリックスで構成されており、中心部に主題となるテーマを、周辺部にテーマと関連する要因やアイディアを記述することで効果的にアイディアの整理を行う発想支援ツールである。

Idea A	Idea B	Idea C
Idea D	テーマ	Idea E
Idea F	Idea G	Idea H

（図 1：マンダラ・チャート イメージ）

「マンダラ・チャート」の特徴は、「制約の中で発想を展開してくこと」[4] であり、「不確実性の回避度」[5] が高い（つまり、あまり自由すぎるとかえって不安を感じてしまう）日本人にはより適切な発想支援ツールであると思われる。また、使い方も非常に簡単（テーマを中心部に書いて、関係するアイディアを周辺部のマスに書き込むだけ）なので、誰でも短時間で多くのアイディアを出すことが可能になる。

同様の発想支援ツールとして「マインド・マップ（Mind Map）」[6] が良く知られているが、図 2 に示すように、「マインド・マップ」は「マンダラ・チャート」と比較して非常に自由度が高く、短時間に幾つものアイディアが出てきた場合、それらを意味ある形でまとめていくことが非常に難しく、マップの作製自体に戸惑いを感じる場合も多いようである。



（図 2：マインド・マップ イメージ）[7]

ここまで「マンダラ・チャート」の解説を行ってきたが、以降、「マンダラ・チャート」を授業のオリエンテーションで利用した実践例を基に、その効果について検証することにしたい。

4-2. 事例検証

4-2-1. 事例検証の対象

今回検証の対象とした授業は、徳島大学総合科学部人間社会学科 2 年次生を対象に平成 19 年度前期に実施された「異文化間コミュニケーション」である。同講義は前期授業終了後計 4 日間の集中講義形式で開講され、受講した学習者数は 51 名であった。

同集中講義は、受講する学習者（主に日本人学習者）の「異文化感受性（Intercultural Sensitivity）」[8] を高めることを主たる目的として実施された。個人の異文化感受性を適切に発達させるには、認知（頭）、行動（体）、感情（心）の統合的な発達が必要不可欠である[9] と報告されていることから、各活動をデザインする際には、

① 認知面（「物の見方」）での変容を促すことを目的とした講義、
② 行動面での変容を促すことを目的としたゲームやグループワーク、
③ 感情面での気づきや変容を促すことを目的としたアンケートおよびグループディスカッション、

を効果的に組み合わせることに注意を払った。活動の組み合わせを考える際には、Kolb [10] が提唱する「体験的学習理論（Experiential Learning Theory）」に基づき各活動の構成を行った。

なお、同講義の日程は表 1 に示すとおりである。

（表 1：集中講義日程 概略）

1 日目：異文化コミュニケーションを体験しよう	
1	グループ分け、Ice Breaking
2	「学びの曼荼羅」作成（昼食時）
3	「学びの曼荼羅」シェアリング
4	異文化カードゲーム BARNGA
5	文化、異文化、コミュニケーション
6	異文化感受性質問紙記入
2 日目：ステレオタイプ（ST）って何？	
1	ST の原因：コミュニケーションスタイル
2	ST の原因：時間感覚
3	ST の原因：学習スタイル
4	ST の原因：価値観
3 日目：ステレオタイプへの対応	
1	異文化適応と異文化感受性
2	異文化適応上の課題
3	「Cross-cultural ちゃんぽん」（学内講師）
4	ステレオタイプからの脱却
4 日目：外国語学習について考える	
1	外国語学習の基本的方向性
2	英語学習のリソース
3	学習のプランを作る

4-2-2. 「マンダラ・チャート」の利用とその効果

【チャートの作成】

同講義で「マンダラ・チャート」を利用した部分は、表 1（1 日目）に記載されている「学びの曼荼羅作成＆シェアリング」である。直前のグループ分けおよび Ice Breaking で午前中の約 1 時間半を使ったため、

① 昼食時（約 90 分）に各グループでチャート作成を行う、
② その後、約 60 分をかけて各グループが作成したチャートを基にシェアリングを行う、

という手続きでオリエンテーションを実施した。

グループでチャートを作成する際に配布した資料は添付資料に示すとおりであるが、具体的には、

① 9 分割マトリックスの中心部には「今回のワークショップで学びたいこと」と記入する、
② まずは、各個人が配布資料に基づき、学びたいことを整理する、
③ 各個人が書き出した結果を基に、グループで一つのチャートを作成する、

という指導を行った。

【シェアリングに向けての事前指導】

上記の手順でチャートの作成を行った後、各グループが作成したチャートを基にシェアリングを実施した。

シェアリングの際には、

① 授業を設計する教師と授業を受ける学習者の間には「意識の差」が存在し、教師が「こういうことを授業で伝えたい」と思っていても、学習者が活動内容について何かしらの疑問を感じていたり、その内容とは別に学びたい事項がある場合には、期待する学習効果が得られないと思われる、
② 従って、教師－学習者双方が授業に対するお互いの「思い」や「期待」を共有し、授業内容の調整（つまり合意可能な枠組みの形成）を行うことが大切であり、今回のシェアリングはそのために行うものである、

という 2 点に関する説明を行った上で、シェアリングを展開した。

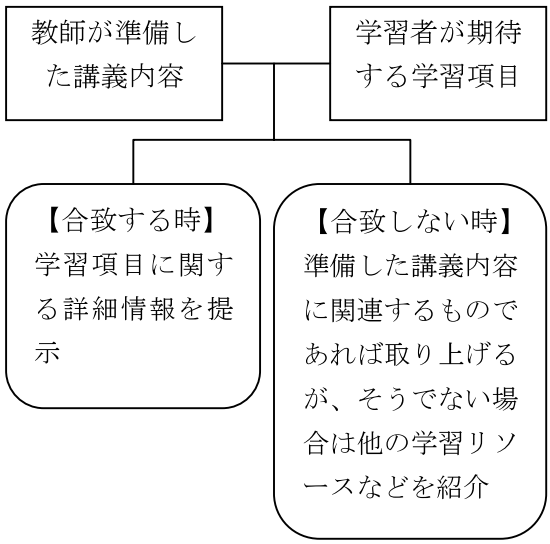
【シェアリングの実際】

各グループが作成した「マンダラ・チャート」には、実に様々な項目が記載されており、同講義で出てきた代表的な項目を挙げると、

① 外国人と仲良くなる方法を知りたい
② 日本文化について学びたい
③ 効果的に英語がマスターできる方法を知りたい
④ 他人とコミュニケーションが上手く取れる方法を知りたい
⑤ 話し上手（または聞き上手）になる方法を知りたい
⑥ 人見知りをなくしたい

といった項目が記載されていた。

今回は、各グループが記載したチャートを概観した後、教師が準備した講義内容と照らし合わせながら各項目についての調整を行ったが、全般的には図 3 に示す方針に基づき各項目の調整を行った。



（図 3：基本的調整方針）

なお、上記の 6 項目については、以下のような解説および調整を行った。

① 外国人と仲良くなる方法を知りたい

（解説および調整）

本講義の目的である「異文化感受性」のレベル Up が重要なカギになるので、まずは全体を通してこのことについて考えて欲しい。「異文化感受性」については、3 日目の授業

で解説を行うので、特に注意をしてもらいたい。

また、「外国人と仲良くなる」ためには「自分も一歩日本を出たら外国人である」ということを理解しておく必要があるので、3 日目に予定している「Cross-cultural ちゃんぽん」を通して基本的な事項について学んでもらいたい。

② 日本文化について学びたい

（解説および調整）

本講義の主たる目的が「異文化感受性」のレベル UP にあるので、今のところ、特別この項目について解説するということは考えていない。しかし、「自文化を知る」ことは異文化との接触においては非常に重要な役割を持っているので、3 日目の「異文化感受性」に関する説明の中に盛り込むことにしたい。

また、「自文化を知る」ことは「自分を知る」ということにもつながると考えられることから、2 日目の「ステレオタイプの原因：コミュニケーションスタイル」で実施する「コミュニケーションスタイル自己診断紙」を基に自文化と自己の関係について考えてもらいたい。

③ 効果的に英語がマスターできる方法を知りたい

（解説および調整）

「効果的に」英語がマスター出来るかどうかは不明だが、「英語学習の基本的方針」については 4 日目に解説を行うので、その解説を基によく考えてもらいたい。

また、同じ日（4 日目）に「英語学習のアクションプラン」を作成してもらう予定にしているので、各自が作成したプランをこれからの英語学習に役立てるようにしてもらいたい。

④ 他人とコミュニケーションが上手く取れる方法を知りたい

（解説および調整）

「他人と上手くコミュニケーションが取れる」ためには、相手にどれだけ共感出来るか、そして共感していることをどれだけ相手に伝えることが出来るかがカギになると思われる。

今回の集中講義では、この点について直接的に言及することはないが、3 日目の「異文化感受性」に関する講義の中で取り上げるようにしたい。

⑤ 話し上手（または聞き上手）になる方法を知りたい

（解説および調整）

今回の集中講義では、時間の制約もあるため、「話し上手」に関する具体的トレーニングを行う予定はないが、3 日目に予定している「異文化感受性」の解説時に「他者との共感」に関する話しを盛り込むので、その解説を参考にしてもらいたい。

「聞き上手」に関しては、3 日目の「ステレオタイプからの脱却」で具体的なトレーニングを行うので、そこで基本的なスキルを学んでもらいたい。

⑥ 人見知りをなくしたい

（解説および調整）

「人見知り」は異文化間コミュニケーション上の課題というよりも、対人コミュニケーションや個人の心理・性格傾向が主な原因となって生じてくると思われることから、この授業よりも、他の心理系の授業で深く学んだ方が良いだろう。

【学習者からの評価】

全般的には、これまで学生が受講してきた授業で上記のような対応をしたケースが皆無であったこともあり、評価としては比較的高いものであったように思う。以降、同集中講義 1 日目に集めたレポートを基に学習者の反応を見てみることにしたい。

なお、引用文中の（　　）内は文脈により筆者が付け加えたものである。

1. 「学びの曼荼羅を作ったので、今回の目標やみんなの勉強したいことがリストになったので、がんばって勉強していきたいと思った。」

2. 「学びの曼荼羅の作成は初めてで、コミュニケーションを同じグループの人ととることができて安心した。」
3. 「ただ聞いてノートに書いて、2･3 日は覚えているんだけど、一週間もすれば忘れてしまう授業ではなく、「曼荼羅」で学ぶ方向性がハッキリしたことで、記憶に鮮明に残る授業でした。」
4. 「初めて自分たちで内容を作るような講義を受けて、とても新鮮だった。「曼荼羅」をはじめ色々な作業や、ディベートがあり、やることが多かったけれど、その一つ一つに意味を感じ取ることができ、とても充実した時間が過ごせた。」
5. 「この授業を通して自分たちが学びたいことを「学びの曼荼羅」で言語化することで、これから 4 日間、自分は何を勉強していくのかが明確になった。」
6. 「曼荼羅を作って、グループのメンバーと少し話せるようになった。」
7. 「時間ぎりぎりまでかかって班全体の学びの曼荼羅を作った。自分が班で一番年上だったので、なるべく発言してまとめようと頑張った。もっと他の班員の意見もきき出せるようにすればよかったと思った。」
8. 「曼荼羅に学びたいことを書くことで、4 日間の WS のポイントがはっきりしたように思う。」
9. 「(「曼荼羅」を使って)「先生と学生の意見をすりあわせる」という考えは、これまで聞いたことがなかったので新鮮でした！何か「認めてもらってるんだなぁ」って感じました。」
10. 「普通は、「先生が授業する」っていう感じだけど、(「曼荼羅」のおかげで) この授業は「学生と先生が作る」っていう感じがしました。」
11. 「(「曼荼羅」をやってみて) 気づいたんですが、何か「自分たちの言うことを聞いてもらってる」っていう気がしてとても良かったです。」

同集中講義期間中、学習者には、①毎日の授業概要ならびに感想について書く「Daily Report」、②集中講義全体の感想などを書く「Final Report」の 2 種類を提出してもらったが、今回、評価資料として提示しているのは、上記①の「Daily Report」（1 日目）で「学びの曼荼羅」について記載されていた部分である。同日の Daily Report を作成する際、特に「学びの曼荼羅について書くように」といった指示は与えていないことから、51 人中 11 人（21.6%）の学習者が同活動についての感想を書くに留まっている。また、今回の Final Report では「授業全体に関する感想および今後の抱負」について書いてもらったことから、本「マンダラ・チャート」に関する記述を確認することはできなかった。

しかしながら、これら 11 件の感想を見てみると、「マンダラ・チャート」を授業のオリエンテーションで利用することによる教育上の効果を幾つか確認することが出来る。受講者が記述した感想が 11 件と少ないことから、今回はその中でも顕著に表れている「学習内容の明確化」および「教師－学習者の近接化」という 2 点に注目することにする。

・「学習内容の明確化」

上記コメント中のコメント 1、3、5、8 に「学習内容の明確化」と直接関係する記述を確認することが出来るが、これは【シェアリングの実際】で示した教師－学習者間の意見調整によるところが大きいと思われる。

学習者が過大な期待を抱きながら授業を受講する可能性があることは前にも述べたとおりであるが、本集中講義に関しては、例年 60 名以上の学生が受講登録を希望することや「異文化間コミュニケーション」という講義名が学生の興味・関心を引きやすいと考えられることからしても、受講者の本講義に対する期待が非常に大きいことが容易に推測できる。

今回の集中講義では、【シェアリングの実際】でも示したように、

① 「マンダラ・チャート」を基に受講者の講義に対する期待を聞き出す、
② 学習者が期待する学習項目と教師が準備している項目が合致している場合、その詳細情報を、例えば「2 日目に予定している○○○で取

り扱います」といった形で提示する、

③ 学習者が期待する学習項目と教師が準備している項目が合致していない場合、十分な関連性があると思われる項目については授業内容に取り込むが、そうでないもの（例えば、「人見知りをなくしたい」など）については他の学習リソースを提示する、

といった手順で対応したわけであるが、これら一連の手順の中でも特に上記の②、③が「学習内容の明確化」に大きな影響を与えたのではないかと思われる。

上記②に関しては学習者が期待する学習項目に関する詳細情報を提供することから、「学習内容の明確化」と直接的な関連性があると思われるが、上記③に関しては一見したところ「学習内容の明確化」とさほど直接的な関連性があるとは思えない。しかしながら、実際の授業では、学習者が期待する学習項目に対して、「A については今回の講義で取り扱うことが可能だが、B については今回の講義とは関係がないので後期の授業で取り扱う」といった非常に具体的指導を行ったことから、学習者が学習内容について明確な境界線を引くことが出来た（つまり、学習内容を明確に出来た」のではないかと考えられる。

・「教師－学習者の近接化」

「教師－学習者の近接化」に関係するコメントはコメント 9、10、11 において確認可能であるが、具体的には、コメント 9 における「認めてもらってるんだなぁ」、コメント 10 における「学生と先生が作る」、コメント 11 における「自分たちの言うことを聞いてもらってる」がこの近接化に相当すると思われる。

これらのコメントも【シェアリングの実際】で示した教師－学習者間の直接的意見調整によるところが大きいと考えられる。

これまでの授業に対するイメージは、コメント 9 の「これまで聞いたことが無かったので新鮮でした」や、コメント 10 の「普通は「先生が授業する」って感じだけど」に見られるように、「授業は教師が主体となって計画・立案するものであり、学習者がそこに入り込むことはない」というものであったと思われる。しかしながら、今回「マンダラ・チャート」を通して学習者の期待する内容について耳を傾け、教師と学習者双方が直接意見調整を行ったことで、両者の距離感を「ぐっ」と縮小し、結果として「この授業は先生と学生が作るっていう感じ」（コメント 10）という印象を学習者に形成させたものと推測される。

5. 結論：教師－学生間のリベラルな関係構築

現行の授業シラバスは、授業の基本情報を学習者に提供することを主たる目的としているが故に、「教師－学習者間の意見調整を通して授業の枠組みを設定する」という点では、明らかに大きな限界がある。その限界を補完するものが、今回注目した「各授業のオリエンテーション」である。そして、そのオリエンテーションで相互に意見調整を行い、教師－学生間の関係をよりリベラルなものとすることで、両者のインターアクションを活性化する素地を形成することが可能になると考えられるのである。

本稿では、「マンダラ・チャート」を授業のオリエンテーションで用いた際の効果を中心に論を展開してきたが、結果として、①同チャートを利用することで、授業で学習する内容を明確化することができる、②同時に、教師－学習者間の心理的距離を縮小することが出来る、という 2 つの効果を確認することが出来た。

本論の趣旨からすれば、特に②の結果は重要である。教師－学習者間には目に見えない心理的格差が存在するが、両者の間にリベラルな関係を構築することこそがよりインターアクティブな授業を構築するための基盤になると考えられるからである。

しかしながら、本稿にもいくつかの課題が残されていることは確かである。

まずは、「マンダラ・チャート」の効果を検証するために用いたデータ 11 件と非常に少ない点が挙げられる。同時に、Final Report において本「マンダラ・チャート」に関する記述を確認することが出来なかったという点に関しても疑問が残る。本当に効果があったのであれば、何かしらの形で Final Report に記述が表れてくると思われるが、今回の調査では確認することが出来なかった。今後

は「マンダラ・チャート」の効果に絞った形でデータの収集を継続し、より広範囲な学習者を対象としたデータを集める必要があると思われる。

また、検証の対象とした授業が集中講義であったという点も課題の 1 つであろう。通常授業では 90 分という時間的制約があるが故に、集中講義のように時間がフレキシブルに利用できるというわけではない。90 分という短時間で学生の期待や意見を「マンダラ・チャート」で集約できるのかどうか、更に検証を積み重ねていく必要があるであろう。

最後に、本稿の主題である「オリエンテーション時に教師－学習者間の意見調整を基に授業の構成を行う」という考え自体をより具体的な形で再考する必要があると思われる。例えば、オリエンテーション時に受講者から「単位の出し方を出席重視にしましょう」という提案がなされたとしたら、それだけで議論が紛糾してしまい、授業内容に関する意見調整が時間的に出来なくなってしまう可能性も考えられる。今後は、「何に関する意見調整が最も効果的なのか」などについて具体的に検討していく必要があるであろう。

注

(1) 松村　寧男「図解　マンダラ・チャート」青春出版社，2007 年

(2) 細川　和仁「授業評価調査における中間評価の有効性」秋田大学教養基礎教育研究年報 1-9, pp.4-12, 2007 年

(3) 神藤　貴昭，川野　卓二「全学 FD の構造と機能」大学教育研究ジャーナル第 5 号, pp.1-12, 2008 年

(4) 前掲書（1）

(5) Hofstede, G. (1984). Culture's Consequences: International Differences in Work-related Venues. Beverly Hills, CA: Sage.

(6) トニー　ブザン，バリー　ブザン「ザ・マインドマップ」ダイヤモンド社，2005 年

(7) 通常のマインドマップではテーマを紙の中心に書くが、本稿では説明のためテーマを左よりに置いている。

(8) Bennett, M.J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R.M. Paige (Ed.), Education for the intercultural experience (pp. 21-71). Yarmouth, Maine: Intercultural Press.

(9) 前掲書(8)

(10) Kolb, D. (1984). Experiential Learning. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

「学びの曼荼羅」

「学びの曼荼羅（マンダラ）」を使って、今回のワークショップで皆さんが学びたいことを整理してみてください。

【マンダラートとは？】

9つのマスを使って自分の思考を整理するツールです。

【使い方】

1. まずは、四角の真ん中にテーマを書きます。今回は、「ワークショップで学びたいこと」という感じで良いでしょう。
2. 周りのマス（マス 01～09）にテーマについて思いついたことを書いていきます。
3. マスがすべて一杯になったら、同じテーマで別の曼荼羅を作ってみましょう。
4. 出尽くしたら、作った曼荼羅を眺めてみます。
5. 出てきた項目を一つの曼荼羅にまとめてみましょう。
6. 最後に、各マスにタイトルを付けてみましょう。

マス 01	マス 04	マス 07
マス 02	今回の WS で学びたいこと	マス 08
マス 03	マス 06	マス 09

【仕上がりはこんなイメージ】

外国語学習 英語や中国語の勉強方法を知りたい	留学体験 留学に興味があるので、体験談を聞きたい	他人との連携 他人とうまくやっていくコツを知りたい
話し方 魅力ある話し方のコツを知りたい	今回の WS で学びたいこと	自分への自信 自分に自信が持てるようになりたい
友達を増やす もっと友達を増やしたい	外国人との付き合い 外国人と付き合うコツを知りたい	人間関係修復 友達と仲直りする方法を知りたい

「学びの曼荼羅」ワークシート

1. 皆さんが今回のワークショップで学びたいことを整理するための活動です。
2. 中心に「今回のワークショップで学びたいこと」などを書き込んでください。
3. 前ページの【使い方】を参考に記入してください。